

萬葉集古義

七上  
地



萬葉集古義

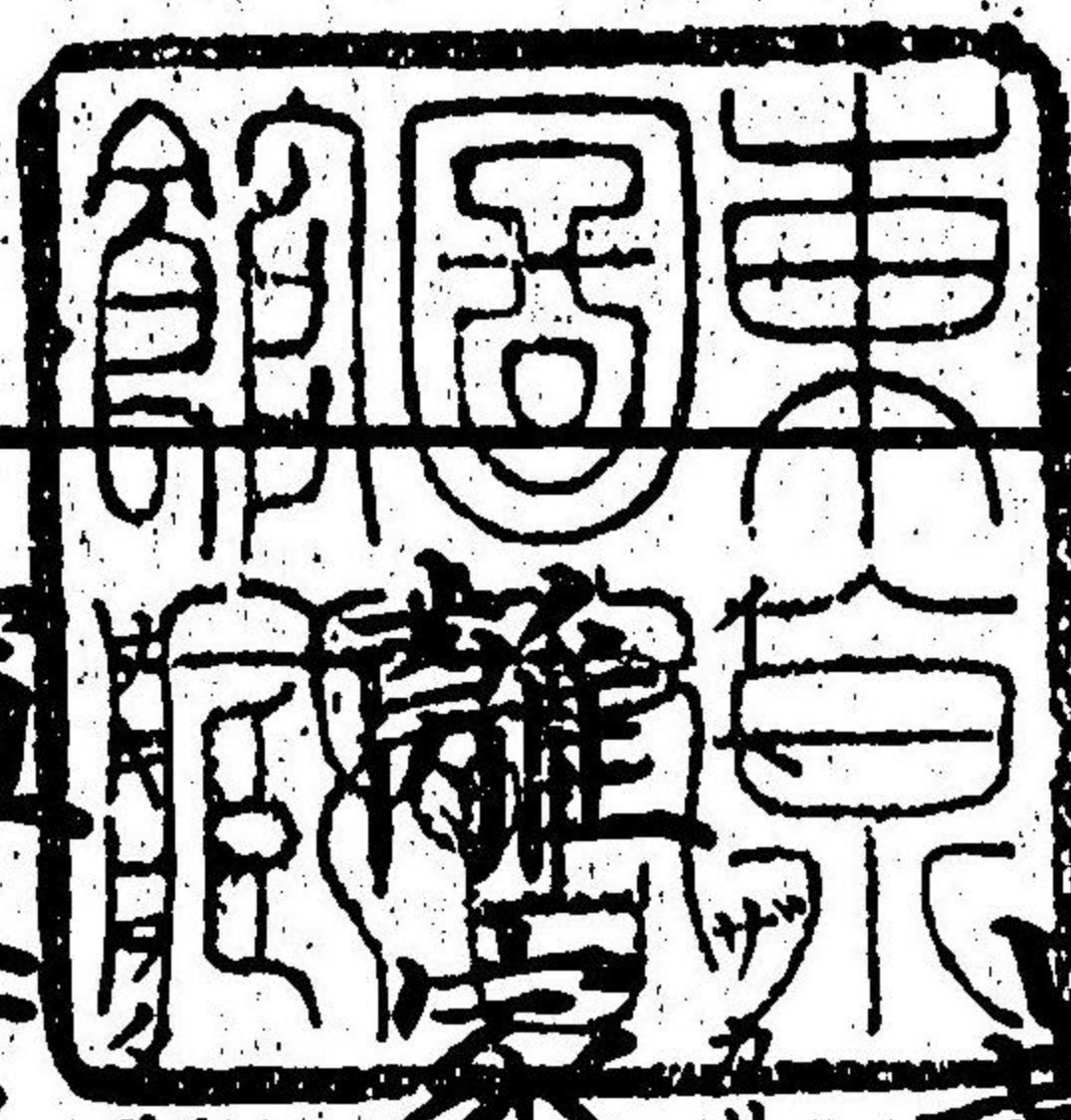
七上地

館書圖京東

冊	九 六 號	架	一 六 函	類	門
---	-------------	---	-------------	---	---



明治十九年九月十一日内務省交付シテ



羈旅作 タビニテヨメル

旅西在者秋風寒暮丹鴈 タビニシアレバアキカゼノサムキユフヘニカリ

喧渡 ウラハル

旅西ハ旅ニよテ爾之とつゞくるハそのさびこのふ

志のる意をきこのをる辭なり○歌意かくれなく

圓方之湊之渚鳥浪立巴妻唱 マトカタノミナトノスドリナミタテバツマヨビ



立而邊近著毛。

圓方ハ伊勢國多氣郡小あり。既く一卷舍人娘子の歌  
小ありて其處小具注りき。○渚鳥ハ十一三四小大海  
之荒磯之渚鳥十五四小武庫之浦乃伊里江能渚鳥十  
七三小美奈刀能須登利又四小美奈刀爾波之良奈  
美多可彌都麻欲夫等須騰理波佐和久云々おどあり。  
又十四三小波麻渚杼里ともよめり。これらの渚鳥  
ハ鳥の名の如く小も聞ゆれど志あらざ。渚小居鳥小  
て鷺鷗サギカメミ睡鳩サゴサドリ千鳥おどの類をお並て云べし。或説小  
みさご

なりと云るハ美沙居渚とよめる歌。古事記沼河日賣  
ある小依て推量小云るのみなり。歌小宇良須能登理叙ともよめり。○浪立巴ハ畧解小  
也の誤か浪のあらく發者と云なり。○歌意ハ圓方の  
りと云り。湊の渚小居て求食アサリを諸鳥の海の浪のあらく發バ  
已の妻と呼令立タテて邊  
方小近づくよとなり

年魚市方。盐千家良思。知多乃

浦爾。朝榜舟毛。奥爾依所見。



年魚市方アエチガタハ尾張國愛智郡の海瀉なり。三卷高市連黒  
 人の歌アエチガタありて其處チクノウラニ注せりき。○知多乃浦爾ハ和  
 名抄小尾張國智多郡あり其地の浦アエチガタなり。年魚市瀉  
 小隣れるなるべし。按アエチガタ小爾ハ若ハ乎字の誤小ハあら  
 ざるの○歌意ハ愛智瀉潮干アエチガタなり小けるらゝその  
 所縁ユエハその隣の智多の浦と朝漕舟も潮干て漕難き  
 故小沖の方小出る  
 の見ゆるとなり

塩干者シホヒレ共トモニ瀉爾出カタニ鳴鶴之ナククツヅノ音遠コエトホ

放ザカル儀イソミ回ス爲ラ等シモ霜。

共瀉爾出トモニカタニハ鶴トモニが已デの友率トモニひて共小瀉トモニ小出トモニてと云ふ  
 り。畧解トモニ小潮トモニいれバトモニやがて共小瀉トモニとなるまトモニ。○歌意  
 小鶴トモニの出トモニてあさるトモニと云と云るハトモニいトモニのトモニ。○歌意  
 ハ塩干トモニ小なれバトモニ即トモニ已トモニの友率トモニひ連トモニて共小瀉トモニ小出トモニて鳴  
 鶴トモニの聲トモニが沖トモニの方トモニ小遠放トモニり行トモニふあれハ磯トモニめぐりトモニて  
 食トモニを求トモニる小トモニてあるらトモニゝさて  
 小面白トモニのけトモニきやトモニとなり

暮名寸爾ユフナギニ求食アサリ爲鶴スル塩滿者タヅシホミテ奥バオキ



浪高三已妻喚ナミ タカミ オノヅマ ヨブモ

已妻喚ハ。オノヅマヨブモと訓べし。此下十九小濱風ハマカゼ寒彌自妻喚毛とあり。オノヅマの假字ハ。十四三十五於能豆麻と見えり。○歌意ハ。風浪の和なごる夕方小五ふれハ。干瀉小出て。食を求る鶴が。汐の満來れば。沖浪高くよきる故小。自の妻をよびさそいつれて。磯の方小飛行よ。さてもあえれのけしき哉となり

古爾有監人之覓乍夜丹摺監イニシヘニ アリケム ヒトノ モトメツノ キヌニ スリケム

真野之榛原マヌ ノハリハラ

摺監監字。舊本小ハ牟と作り。今ハ拾穂本小從つ。○真野之榛原ハ。攝津國八田郡小あり。三卷廿高市連黒人歌小見えて。其處小注り。○歌意かくれらるるところなく。真野の榛原と。古人のめでしと云故事ありて。いへるな

るべし

朝入爲等磯爾吾見之莫告藻アサリ スト イソニ アガミ シナ ノリソ



乎。誰島之。泉郎可將刈。

朝入爲等ハ求食をるとと云意なり。朝入といハ此上  
小求食と書る小同じく何小限らハ魚菜の類を求  
るを云言なり。畧解ハ朝入ハいざりふりと云るハと  
や。○泉郎ハ白水郎あるを麻呂と奮と作る類ハ白水  
を泉と作るなり。かゝるを畧解ハ推て白水白水郎の  
事ハ既具注り。○歌意ハ魚菜の類を求るとて磯小て  
吾見て置くなのりそを此程いづれの島の海入の刈  
とりて食ふらむとなるべし。按小此歌ハ上小島廻爲

今日毛可母奥津玉藻者白浪  
之。八重折之於丹。亂而將有。

等磯爾見之花風吹而浪者雖縁不取不止とよめる類  
小て物の便小吾見初女と誰の已妻とをらむとい  
ふ意を譬喩する歌なるを混  
て羈旅の標内小入し小や  
今日毛可母奥津玉藻者白浪  
之。八重折之於丹。亂而將有。  
八重折之於丹ハ浪の彌重小折返をその上小と云な  
り。廿卷丁廿五小波麻爾伊泥豆海原見禮婆之良奈美乃



夜ヤ敞ハ乎ラ流ル我ガ宇ウ倍ハ爾ニ安ア麻マ乎フ夫フ禰ニ波ハ良ラ爾ニ宇ウ伎キ互テ云々。  
古今集大歌所の歌ふめざしぬらそお沖ふとれ波と  
あるも、沖ふ折返せと云意なり。○歌意ハ、昨日のみな  
らぞ、今日も白浪の彌重ふ折返を其海上ふ奥つ玉藻  
はみざれておもゆるるらむおえれ急のぬ旅  
路ならバ、今日も行てきても見さしやとなり

近江之海。湖者八十。何爾加君  
之舟泊草結兼。

湖者八十、十、字、舊本ふ十と作るハ千賀真恒者、字ハ有  
の誤歟と云り。此、説いれあり。こナトヤソアリと訓  
べし。十三六ふ近江之海泊八十有云々。又十卷三十ふ  
天漢河門八十有何爾加君之三船乎吾待將居とある  
と思合べし。三卷ふ近江海八十之湊爾鶴佐波二鳴と  
もよめり。○草結兼ハ、旅行の道標ふいづれの湊ふ船  
泊て、草を標ふ結び置けむと旅人をおもひてよめる  
なり。契沖の草枕を結ぶ意  
とせるハ、古義ふ非也。○歌意ハ、近江の海の湊ハ、  
八十と数のざりなく多くあり。その多の湊のうち、い  
づれの處ふる君の舟泊て、勝示小草を結び置けむぞ



とな

佐左浪乃。連庫山爾。雲居者。雨

曾零智否。反來吾背。

佐左浪ハ近江國の地名なり。前ハ往々見えて。既く具  
注り○連庫山ハ佐左浪ハある山の名なり○歌意ハ  
樂浪の連庫山ハ雲ハ居れば。あならむ雨ハふるとい  
ふぞ。其雨のふり來らぬ内ハ。えやく反り來さまへ吾

夫よとなり。此歌ハ。夫の旅行ハ家ハ留れ  
る妻の。おもひやりてよめるなるべし

大御舟。竟而佐守布。高島之。三

尾勝野之。奈伎左思所思。

大御舟ハ。天皇のなり○竟而佐守布ハ。湊ハ泊て浪間  
を伺ふよしなり。佐守布の言ハ。既く往々見えて。伺ひ  
守る意なり。候そる意と云る説ハ。三尾勝野  
ハ。近江國高島郡三尾郷の勝野なり。三尾ハ。和名抄ハ



高島郡三尾美兵部省式小近江國驛馬三尾又繼體天

皇紀小近江國高島郡三尾之別業ナリトコロと見え九卷十六

碁師歌小水尾崎ミツノサキとあるも同ト勝野ハ三卷十九小何

處吾將宿高嶋乃勝野原爾此日暮去者と見えクハスヤドリオモタカシマノカチヌハラニコノヒクレナバ

小和名抄小高島郡角野津乃とあるも古かど野とい

野ハ三尾郷主稅式小若狹國海路自勝野津至大津船

○歌意ハ天皇の大御舟の泊させ給ひてさて浪間を

伺ふらむ高島の三尾の勝野の渚のトモお小おむい

やらるゝとなり此歌ハ近江國へ行幸ありハほと京

小て思ひやりてよめるなるべハ宗祇集小秋の日

のとぶ三尾の御崎小霧さち  
ささる今の歌  
小よれるあ

何處可舟乘爲家牟高島之香イヅクニカフナノリシケムタカシマノカ

取乃浦從已藝出來船トリノウラユコギデコシフ子

香取乃浦ハ高島郡小あり十一ハ小大船香取海愠下オホゾノカトリノウミナカリオヒ

云々とあるも同ト○來ハコシと訓べハクルと訓て

○歌意ハ高島の香取の浦より漕出て來小其船ハ  
そも何處の漕小て船乘して漕出せし船小やあらむ



とな

斐太人之真木流云爾布乃河

事者雖通船曾不通

斐太人ハ、私人ナリ。三代實錄三十一。元慶元年夏四月九日庚辰辰刻始構造大極殿云々。饗行人夫以下飛驒工已上云々。飛驒工六十人云々。賦役令小斐陀國庸調俱免每里點匠丁十人云々。木工寮式小凡飛驒國匠

丁三十七人以九月一日相共參著寮家不得參差類聚三代格小兼和元年四月廿五日太政官符小應搜勘言上飛驒工事など見えて古飛驒國より良匠の出されバ、木工とも私人とも飛驒人と云なり。拾遺集小官つくみのてをのとおと、あある目とも見し哉。大和物語あまのきさる飛驒の工のつきおとのあなる物語あまのきさるや世中職原抄大全云木工寮大工之所作皆掌之古飛驒國多大工參京都木工頭奉行曰之飛驒工也日本後紀曰延曆十五年十一月己酉令天下搜捕諸國逃亡飛驒工等異稱日本傳云飛驒國多匠民巧造宮殿寺院迄十一廿七小云云物者不念斐太人乃打今稱飛驒工也。墨繩之直一道爾。爾布乃河ハ、大和國小あり。二卷八丁小丹生乃河瀬者不渡而云々とある歌小具注り十



三四 小谷取而丹生檜山木折來而云々○歌意ハ丹生  
の川ハ私人の真木の大木を流すと云急流あれば此  
岸より彼岸物ハいひのをせども舟の通ふことハ  
叶をぞといへる小や真木流云と云るハ今目前真  
木流まを見とる小ハ非ぞ平常真木の太木を流まと  
云急流あればと云意ナリ但し此も譬喻歌ふて言ハ  
使さして此方彼方いひ通をせども實  
小ハ逢ことのならきを云る小やあらむ

アラレフリ。カシマノ。サキヲ。ナミタカミ。スギテヤ  
霰零鹿島之崎乎浪高過而夜

ユカムコヒシキモノヲ  
將行戀敷物乎。

霰零ハ枕詞ナリ。霰零音のかしましきと云意あつバ  
けり。廿卷。小阿良例布理可志麻能可美乎伊能  
利都々云々ともあり○鹿島之崎ハ和名抄ハ常陸國  
鹿島郡鹿島神名帳ハ常陸國鹿島郡鹿島神社。名神大  
常陸國風土記ハ香島郡古老曰難波長柄豊前大朝  
御脱款 宇天皇之世己酉年大乙上中臣子大乙下中臣部鬼子  
知本脱款  
等請惣領高向大夫割下総國海上國造部内輕野以南  
一里那賀國造部内寒田以北五里別置神郡其處所有



天之大神カレトス社坂戸社沼尾社合三處惣稱香島天之大神  
 因名郡焉風俗説云霞と見えり鹿島神のことハ廿  
 九卷零香島之小牡牛乃三宅之瀟爾指向鹿島之崎爾云  
 云とも見ゆ新後撰集ふよ一人も夜や寒のらゝあら  
 れふるかゝまのさきの沖つ塩風○戀敷物乎ハ愛ミシキモノヲ  
 き物をと云むの如し戀ミシキモノとハ賞愛メデまるゝ方小云るな  
 り二卷小衣有者脱時毛無吾戀君曾伎賊乃夜三卷小  
 石竹之其花爾毛我朝旦手取持而不戀日將無十七小  
 多麻久之氣敷多我美也麻爾鳴鳥能許惠能孤悲思吉  
 登伎波伎爾家里ふどある小同トク皆愛メデきよゝなり

○歌意ハ鹿島の崎の見れども飽オモシロ可メ怜シ愛メき物  
 を浪の高きトモシキ故小其崎小留り居ること叶トモシキをシて  
 こぎ放れてや  
 行むとなり

足柄乃アシガラノ管根飛超ハコ子トビコエ行鶴乃ユクタツノ之見トモシキミレ  
 者日本之所念ハヤマトシオモホユ

管根ハ相摸國足柄郡小ありてかくれなり○歌意ハ  
 足柄の管根山を飛超て京の方へ行鶴を見ればこれ



ゆあのごとく、京の方へ行ふことそと、うらやま  
くいていとゞ大和國の、一をぢ小戀しく思をるゝと  
な

夏ナツ麻ソ引ビク海ウナ上カミ滷ガタ乃ノ奥オキ津ツ洲ス爾ニ鳥トリ

者ハ簀ス竹ダケ跡ド君ギミ者ハ音オト文モ不セ爲ズ

夏ナツ麻ソ引ビクハ枕詞なり。十四初小奈都素妣久宇奈加美我  
多能於伎都渚爾布禰波等杼米牟佐欲布氣爾家里又

ハ武藏國歌小奈都蘇妣久宇奈比乎左之豆云々とあ

り此枕詞の屬の義ハまづ夏麻と作るハ借字小て忠  
集小をさめ殿よりあつそ給へる小空蟬ハさもこそ  
ふあめ君あからてくるゝ夏そと誰の告まゝとありて  
夏麻と云ものゝあるより此小魚釣ナツ緡ソ挽ビクなり魚釣と  
かく書されども字ハ借字なり賣可尾能美許等能奈都良  
云ことハ五卷小多良志比賣可尾能美許等能奈都良  
須等美多々志世利斯伊志遠多禮美吉とあるこれな  
り故釣ツリ緡ソと魚釣ナツ緡ソと云釣竿と魚釣竿と云一なる鏡字  
小藿耀同菜豆利坐半と見えさるも魚釣竿の謂なり  
藿字ハ藿ふるべし毛詩小藿々竹竿以釣于淇とある  
小本づきて釣竿の義とせる歟耀字ハいあからむ未  
考得む若ハ耀のされど權も棹と同トけれど釣竿の  
義小用いさること見當らぬいふのけりかくて魚都  
れどさる類の字字鏡小ハ多く見えさりかくて魚都



利と云べきを魚都と云るハ、利ハ活用言小て自省の  
る例なり。作田井光など云る類を合思ふべし。挽とハ  
古事記上卷小、栲繩之千尋繩打延爲釣海人之口大之  
尾翼鱸佐和佐和邇控依騰而云々とある控なり。さて  
大のと海上ふて魚釣小ハ、その釣繩とていと長き繩  
小枝緋をあまこつけ、その緋へ鉤をつけて遠くうち  
延おきて、その繩をひきよせあげて、鉤をくひこる魚  
をとることなれば、控といへり。古今集小伊勢の海の  
海人の釣繩打延てと云るも是あり。さて妣久と濁る  
ハ古の音便小て、かゝる所をも濁りたり。五卷小久

禮奈爲乃阿我毛須蘇毘伎廿卷小乎等賣良我多麻毛  
須蘇婢久許能爾波爾とある小同じかくて海上との  
のれるハ、まづ海上ハ地名ながら、海際の意小とりて、  
魚釣緋を挽海上と云係するなり。集中小綱手引海と  
よめると同趣なり。さて海際を海上と云ることハ、五  
卷詠鎮懷石歌小、宇奈可美乃故布乃波良爾云々とあ  
るハ、海際小ある子負原と云小て、其意今と同一きを  
思ふべし。宇奈比とつゞけこるハ、海之合の意ときこ  
えこり。十三小夏麻引命號貯とあるのみハ、未考得ざ  
れども、これハ引の下脱語あるべければ、今よく考へ



ていふべし。抑この枕詞集中小夏麻と書する字小拘りて昔より其意を得たる人一人ご小なし。冠辞考の説ハ小あまなひのこく。○海上瀟海上ハ古事記小上菟上國造下菟上國造本紀小上海上國造下海上國造とあり。和名抄小上總國小下總國小海上郡ありて字奈加美と注せり。上海上ハ上總國下海上ハ下總國なるをいへるなり。此小いへるも右の内なら。何の國あるをいへりとも定めらる。瀟ハ于瀉あり。○鳥者篁竹跡ハ鳥ハ集りさこけど、云の如し。○君者音文不爲ハ。キミハオトモセズと訓べし。ハと訓旅行し人の。

音信もせびと云なり。十六サセ小吾門之榎實毛利喫百千鳥千鳥者雖來君曾不來座意詞似より。○歌意ハ海上瀉の奥つ洲ふよ。あき鳥ハ集りさこけども旅行し君ハあべて音信もせびいあありけむおほつあなりとなり

若狹在三方之海之濱清美伊  
往變良比見跡不飽可聞。



三方之海ハ和名抄小若狭國三方美加郡三方カクとあり。その海なり。伊往變良比イキカヘラヒハ伊ハそへ言往還ユキカリの伸りさるなり。伸さるハ緩小往反イカを容なり。○歌意ハ若狭小ある。三方の海の濱の清くて面白き故小行のへり行のへりつゝいくさびとなく見れどもさてもあきさらぬこと哉となり

イナミヌハユキスギヌラシアマツタフヒ  
印南野者往過奴良之天傳日

カサノウラニナミタテリシユ  
笠浦波立見。

印南野ハ既くあまアマツタフ出さり。○天傳ハ日の枕詞なり

○日笠浦ハ播磨國明石小あり。推古天皇紀小十一年

秋七月丙午當麻皇子到播磨時從妻舍人姫王薨於赤

石仍葬于赤石檜笠岡上云々とあり。○波立見ハナミ

タテリシユと訓べし。タテルと訓あゝる處をタテル

と云てしてタテリと云ハ古歌の格なり。○舊本小一

云思賀麻江者許藝須疑奴良思と注せり。思賀麻江賀

濁音の字を書るハ和名抄小播磨國飭磨郡とあり。其

地ハ正くあらむの江なり。十五セ小和都美乃宇美爾伊豆多流思

可麻河泊とも見えり。○歌意ハ吾行印南野ハもえ



や歴往過ぬるふてあるらしくその所由ハ。

檜笠の浦ふ浪のこてるの見ゆとなり

家爾之氏吾者將戀名印南野

乃淺茅之上爾照之月夜乎。

歌意ハ印南野の淺茅の上小照し月の面白さを後小  
家小のへり行て戀しく思たむなあとなり印南野を  
過るはと月の真ありしを家小のへりて  
後小戀慕むことをのねて思へるなり

荒磯超浪乎恐見淡路島不見

哉將過幾許近乎。

不見哉將過元曆本小過を去と作てこズテマイナム  
とよめり○歌意ハ淡路島ハそこをく間遠小あらび  
甚近きを荒磯を超る浪のあらくておそるしき故小  
船をよまることを得せざして見まらしく思ふ淡路  
島を見ざして過  
行なむのとなり



朝霞不止輕引龍田山船出將

為日者吾將戀香聞

歌意ハ難波津より船發せむ日ハ霞の常ふとなびき  
て面白き故郷の方の龍田山を戀しく思むの嗚呼  
さても見あぬ龍田山そとなり龍田山  
ハ西ハ河内國東ハ大和國おればなり

海人小船帆毳張流登見見左右

荷鞆之浦回二浪立有所見

鞆之浦ハ備後國小ありニ卷五十小太宰帥大伴卿歌  
小見えてそこ小注しき○浪立有所見ハナニタテリ  
こユと訓べし古歌の格なり畧解おど小ナニタテル  
ざり○歌意ハあれハ海人小船小帆を張る小やと  
見るまで小鞆の浦のめぐり小  
高く浪の立るの見ゆとなり

好去而亦還見六大夫乃手二



マキモタルトモノウラミヲ  
卷持在鞞之浦回乎。

好去而を。マサキクテと訓べき例。集中小多し。九卷三  
丁小。吾思吾子真好去有欲得。十三三丁小。新夜乃好去通アカオモラアゴマサキクアリユン  
牟十七マサキクテアレカヘリコム丁小。好去而安禮可弊里許牟。廿卷三丁小。好去マサキクテアレカヘリコム  
而早還等。ふど見えさり。書紀小。行矣とサキクとよの  
り。漢書の師古の注。小。行矣猶今言好去とあり。○第三  
四句ハ。鞞トモをいたむ料の序なり。鞞ハ弓射る時。左の手  
小。卷附るものなれハのく云り。鞞の事ハ。一卷小。具注  
り。○歌意ハ。この鞞の浦の面白きけしきと。今のみ見

て止べき小あらねバ。平安ありて。

又後小ものへり來て見むとなり

トリジモノウミニウキ井テオキツナミサワク  
鳥自物。海二浮居而奥津浪。驂

ヲキケバアマタカナシモ  
乎聞者數悲哭。

鳥自物ハ。枕詞なり。○數悲哭ハ。數ハ。まぐれて甚しき  
といへり。八卷三丁小。安麻多須辨奈吉。十二三丁小。安マタクシモ  
萬田悔毛カナシなどあり。悲ハ。此ハ字の如し。哭ハ。歎息辭な  
り。哭字。集中モと訓べき處小。あまゝ用ヒさり。○歌意ハ。



船小乗て海上小浮居て、奥つ浪の立動く音を聞ば、  
ぐれて甚く心ばそく、さても悲憐き海路哉となり

朝菜寸二真柁撈出而見乍來

之三津乃松原浪越似所見

歌意ハ今朝風波の和たぎる間小目のあさり見つ、  
撈來一三津の松原の今ハ遙小浪越小見ゆとなり

朝入爲流海未通女等之袖通

沾西衣雖干跡不乾

袖通ハ袖通りて下著まで沾る、よなり○雖干跡  
不乾上小雖涼常不干とあり、雖字ハドともドモとも  
訓ハドと訓志めむとて、跡字常字をそへて書り○歌  
意ハ魚菜の類を求るとて、海人少女の袖通りて下著

までいさくと沾小一衣ハはせ  
どいそえやまくかこのびとなり

網引爲海子哉見飽浦清荒磯



見來吾ミニ コシ アレラ

飽浦ハ十一アキラニキナ小水國之飽等濱之志貝とよめり玉  
勝間小飽等濱ハ紀伊國海士郡賀田浦の南の方小田  
倉崎といふ所ある是ありと里人の云傳へるとそ  
と云り按小此ハ浦の下小海字おどありとふと寫  
し脱しとる小もあるべしさらバアキラハと訓べ  
し此歌ふてハアキラハと四言小よめりとも思えれ  
ねバなり○歌意ハ紀伊國飽浦の海の清き荒磯の面  
白さ小こぶく見小來し吾ふるを外目小見人ハ網引

とる海人と見らむのとなり此下十八小濱清美磯爾  
吾居者見者白水郎可將見釣不為爾又廿三塩早三磯  
回荷居者入潮為海人鳥屋見盪多比由久和禮乎三卷  
十五小荒枿藤江之浦爾鈴寸釣白水郎跡香將見旅去  
吾乎アレラみな似

とる歌なり

右一首柿本朝臣  
人磨之歌集出

山ヤマ越コエ而テ遠トホ津ツ之ノ濱ハマ之ノ石イ管ツ自ジ迄カヘリ



# 吾來含而有待。

コム マデ フミコ テ アリ マテ

山越ヤマユキ而ニハ第四句の上小移シして心得ココロべし。畧解リョウゲ小山越コヤマユキ而ニハ遠トホと云

へありし枕詞マクシありと云るハ甚誤シなり。ふ次ツギ小云コトを見て考ふべし。○遠津トホツ之濱ノハマハ十一

三十小霰零アサリ遠津トホツ大浦爾オホウラニ縁浪エリナミ本居氏ホンイノウヂ云ク大字オホナリと見えて

其歌次ウタツギ小並コナリびて木海キウミ之名ノナ高タカ之浦ノウラとよめれば紀伊國キイノクニ

なるべし。古事記コトコト小遠津コトホツ年魚目トシイサメ々微比賣ヒメとある遠津トホツ

も紀國キノクニの地名ノナふるべし。と本居氏ホンイノウヂ云り。○石管イシツツ自ヨリハイ

ツツツツと訓ツツべし。磯躑イソツツジ躑ツツなり。二卷ニクワン小水傳コミヅツツ磯乃浦イソノウラ回

乃石ノイシ乍ツツ自ヨリともよめり。昔カゼ來キ此コノ石管イシツツ自ヨリ石イシ乍ツツ自ヨリをイハツ

と和名ワナ以波豆イハヅか之ノとある小依コヨて躑躅ツツジの一種イツクの名ナと

心得ココロとるハ大オホき誤アヤマり石イシハかカあらむイソイソ小コて磯際イソノヘ

小生コナマとるつツトトなり二首ニウタあアがらみミあ海邊ウミノヘふフよめり

あても其意ソノイあるをさサとるべし。磯イソ小生コナマとる松マツを磯松イソマツ

ハ余オノが發明フメイせるなり。此コノなほ品物シモノ解トク小具コタガヒ云クるを照見テウケン

て考カウべし。○迄マデ吾來オノキミハ按アツ小吾字コナミジハ返マゼの誤アヤマるべし。有

草書クサシテハ似ニたり。さらバカバカヘリコムマデマデと訓ツツべし。此

下シタ十九ジュウユウ小足代コタダシ過ス而ニ絲鹿イトカ乃山ノヤマ之櫻花ノサクラハナ不散チリナシ在南ミナミ還來マタキミ萬マン



らむハ、いとく口をききことおればありとつゝ、おほせさるな里、右小引く足代過而云々も、絲鹿山の櫻花よ、足代過てこの還り來むまで、散

ぎいて有れと云意ふて、同體の歌なり

大海爾荒莫吹四長鳥。居名之

湖爾舟泊左右手。

○歌意ハ、居名の湊小船の行著まで、大海小嵐吹て浪

荒く立ゝむるこ

とあわれとなり

舟盡可志振立而。廬利爲名子。

江乃濱邊過不勝鳥。

可志振立而ハ、和名抄小唐韻云、戕柯所以繫舟、漢語抄云、加之と見えて、舟を繫ぐ杙を、舟盡る所へ振立るなり、十五、十四、小、大船爾可之布里多豆天波麻藝欲伎麻里布能宇良爾也、杼里可世麻之廿卷、十四、小、安乎奈美



爾蘇豆佐閉奴禮豆許具布禰乃可之布流保刀爾左欲  
 布氣奈武可るどもあり○廬利爲名ハいりせむと  
 一念お思ひ入るるよと急おいふ辭なり○子江乃  
 濱邊ハ按ふ江ハ瀉字なりけむと草書より書誤れる  
 なるべしさらバコガタノハマへと訓べし子瀉ハ十  
 六丁廿六小粉コガタノ瀉乃海と見えて清原元輔集小浪間分見  
 るのいしな一伊勢の海のいづれ粉瀉の名残なるら  
 むとあれば伊勢國の名處なることあられさりさて  
 海とよめるのらハ濱ともいふべきことさらなり  
 くてこの羈旅作の第二章小既く圓方之湊の歌あり

圓方ハ伊勢の名處あればこゝも同國の子瀉とよ  
 めるなり舊來名字を第四句に屬て名子江乃濱邊と  
 江ハあれども此歌ハ前後のつゞきを見る小名兒の  
 海ハ津國の名所あるべしと見え又越中亦乃海と攝  
 津國ハ此下小ハ名兒乃海と見え又越中亦乃海と攝  
 能海此下小ハ名兒乃海と見え又越中亦乃海と攝  
 みて奈吳江之濱といへるこゝハ又越中亦乃海と攝  
 いふべき理あらねバ津國の名  
 兒あらむとい思えれむむ ○歌意ハ子瀉の濱の  
 風景のあのぢおもしるさふこぎ過るふこへげ思え  
 る、哉いでや今日ハこの濱邊小舟こぎ泊て戕剗ふ  
 り立て旅宿りして  
 あぐさまむとなり



妹門イモカ出入カド乃河之イリイヅ瀬速見ミ吾馬ガハノ

瓜衝ツマ家思良下ツクイヘモフ

妹門イモカハ枕詞なり○出入乃河ハも一本のまゝならバ  
入野河イリスガハなるを集中小振山ユヤマを未通女等之袖振山ヲトメラガツテユヤマとよ  
める類ふて枕詞の連ふよりてのく云るなるべし入  
野河ハ此下セ六小サ劔後朝納野ウツリサヤニイリスニクズヒクワギモ通葛引吾妹モ十卷五十  
小左小牡鹿之入野乃為酢寸キなどよみて神名帳小山  
城國乙訓郡入野神社とあれば其處の川を云ならむ

かくて古へハ野をバヌとのみ云れば此ももとハ入  
野川とありけむと後小野をハと唱ふせとなりて古  
を知らぬ人のふと野を乃と寫誤れるならむ。但イモカ入  
野河イリスガハをよめる歌他小見えぞ一説十一小イリスガハ妹門  
入出見河乃床奈馬爾イリスガハノトコナメニとある小依てコ此も入出水河と  
ありしを入出を倒置水オキタタと乃小誤れるなりと云り是  
面白しさらバ山城國相樂郡泉河なり○家思良下イモフラシモハ  
家人の吾を思ふらしと云なり母ハ歎息辭なり○歌  
意ハこの渡る川の瀬の急き故小吾乗る馬の瓜衝て  
なづむふやいや家人小戀し思えるればのれる馬



の爪づくことありといへば家人の吾を戀しく思ふ  
故なるらう。さても家路戀しやとなり。三卷三十一笠朝  
臣金村歌小鹽津山打越去者我乘有。  
馬曾爪突家戀良霜とある小同ト

白栲爾丹保布信土之山川爾。

吾馬難家戀良下。

白栲爾云々ハ白くりるハく小不ふ真土と山名を  
白土小なして云のけより丹保布ハ赤白小のざらむ。

色の映々しきと云言なり○歌意かくれ  
ころところなり。末句ハ上の歌小全同ト

勢能山爾直向妹之山事聽屋

毛打橋渡

歌意ハ夫の山小直くさく向へる妹の山ハ夫のい  
ご婚むと云言と妹の聽りけ引バ小や其二山の間  
の川小打橋を渡して安く相通ふべく設なころと  
なり○本居氏妹山と云ハ兄山あるふつきてころま



りけて云る名ふて、實ふ然いふ山あるふいありどさ  
 れば兄山の事ハ、さうのふよめれど、妹山の事とてハ  
 さうてよめる歌見えど、皆兄の山ふつきての詞のあ  
 や小、妹山とも云るごときこえて、兄山をいへば、て  
 ごと、妹山をよめるいなし。此歌も、兄山とこゆる時小  
 谷川ふどふかりそめなる橋をこさせる所を見て、そ  
 のあさりふならべる山を、あり小、妹山として、かくハ  
 よめるなるべしと云り。あや其説、玉勝間九卷、小具、兄  
 見えたり、今ハ畧して引つ。  
 の山、妹山を連ねよめる歌ハ、四卷廿三、小、後居而戀乍  
 不有者、木國乃、妹背乃、山爾有益物乎、此、下十八、小、麻衣

著者夏桎、木國之、妹背之、山二、麻詩、吾妹、又十九、妹爾戀  
アガコエ余越去者、勢能山之、妹爾不戀而有之、之、左、又、人在者、母  
ノマナ之最愛子、曾麻毛吉、木川邊之、妹與背之、山、又、吾妹、子爾  
アガコヒ吾戀行者、之、雲、並居、鴨妹與勢能山、又廿三、大穴道、少御  
カミノツクモ神作、妹勢能山見吉、十三廿六、小、木國之  
イモノ云々、妹乃、山勢能山越而云々、ふどあり

木國之。狹日鹿乃浦爾。出見者。

海人之燈火。浪間從所見。



狭日鹿乃浦ハ木居氏海士郡小テ雜賀庄トテ廣き所  
 なる其の中小若浦の西方小雜賀崎ト云所あり此こと  
 り雜賀浦あるべしと云り六卷丁十二長歌小左日鹿野  
 とあるも同地なり○歌意かくれさるところなり○  
 元曆本并活字本此歌より已下十四首下の  
 玉津島雖見不飽云々の歌の次小入れり

麻衣著者夏桎木國之妹背之

山ニ麻蒔吾妹

歌意ハ己のさき小妹背の山を往はと其山小麻蒔  
 居一妹の目小つききてりるをありの今吾の麻衣  
 と取著ぬればいとどのの麻蒔居一妹の面影の思ひ  
 出られてなつあしく慕をいと云るなるべし  
 衣を著てあれば麻まく妹よ縁ありてむつまじく  
 さき小妹背の山小麻蒔一妹を今思ひ出る意あら  
 尾句麻蒔之妹ふどあるべし麻蒔吾妹とてハ過去  
 辞あけこれ歌ハ麻蒔吾妹の説まされ居る如し  
 のら云此歌ハ麻蒔吾妹の巻小麻蒔居る如し  
 京と云遠見無用爾布久とあるも袖吹反せ明日  
 べき如く無用ふ袖吹反す明日香風その吹反せ  
 風今ハ無用ふ袖吹反す明日香風その吹反せ  
 の麻衣をききてあるゆゑ小麻まく疑ふべきこと  
 思

萬葉古義七上

百一



ふ意と一てハ。  
あふく情あ  
さびてきこ  
ゆるさや

右七首者。藤原  
郷作。未審年月。

七首とあれど、山ヤマ越ユエ而云々の歌より已下八首あるべし。誤れる小や○藤原郷ハ契冲云藤原北、卿小て、房前  
あるべきを北の字

おちこるふこそ

欲得ツトモ褰ガト登ト乞コハ者バ令取トラ貝セム拾カヒ吾ヒリス乎アレヲ

又ラスナ オキツ シラナミ。  
沾莫奥津白浪。

貝拾ハカヒヒリフと訓べし。ヒロフと云ハ。○歌意ハ。  
古言ハ非ツト也。

己の濱邊小出て貝を拾へバ、奥つ浪も褰ツトもホシのな欲き

とて、此、貝を取むと打縁来るらむ。若褰ツトはくハ、汝小

も取せむそ、吾をバ沾をことなあれ、奥つ白浪よと云

るなるべし。これ余の考あり、畧解

とらせむ為、貝拾ふと云意とせ

テニトルガカラニワスルトアマノイヒシ

手取之柄二志跡、磯人之曰師。



戀忘貝言二師有來。

コヒワスレガヒ。コトニシアリケリ。  
手取之ハ。テニトルガと訓べし。テニトリシとよみて  
ワスレヌとの訓でハ。ハ。志をワスレシとよ  
調ハざる故小ころし。○歌意ハ。戀忘貝を手小取れば  
必ス思ふ事を忘ると海人の云ハ言のみ小して實お  
しいのふとなれば。戀忘貝を手小取れば。家路をも  
忘るべき小さハあくいていと

家人の戀しく思えるゝととなり

求食爲跡。磯二住鶴曉去者濱。

風寒彌自妻喚毛。

カゼサムミ。オノヅマヨブモ。  
歌意ハ。食を求るとして。海の磯邊小下居る鶴の夜の  
明ゆくと。濱風の寒くふく故小。己の妻を呼よ。さても

あえれおる聲やとなり。上小暮名寸  
ニアサリスル。タシホミテバ。オキナミ。タカミ。オノヅマヨブモ  
爾求食爲鶴塩満者。奥浪高三已妻喚

藻荇舟奥榜來良之妹之鳥形

見之浦爾鶴翔所見。



妹之島形見之浦ハ紀伊なるべし。神名帳ハ紀伊國名  
草郡堅真神社あり。形見ハ若ハ其地ノ○歌意ハ海人  
ノ藻と刈舟ノ奥の方より漕來するらし。其舟ハ驚きこ  
りと見えて。妹ノ島形見ノ浦ハ鶴ノ飛のける。見ゆ  
とな

吾舟者從奥莫離向舟片待香

光從浦榜將會。

從奥莫離ハオキヨナサカリと訓べし。サカサカ  
るべきやりの處あるをソの辞ハあらくをへさる辞  
あれバあるもあきも意ハ同トとなり。あはるを近  
世の歌どもふハと一ハサカサカリと云べきナの言  
とハ器きて下のソを云テサカサカリソと云る類ま  
くハ大いさ非なりナハ必ス奥ハ離る勿と云意なり。  
從ハ例の敝ハ通ふ從なり。三卷十九ハ吾船者牧乃湖  
爾榜將泊奥部莫離左夜深去來とあるハ同ト○向舟  
ハ迎舟あり。沖の方ふ出さる船の歸ると迎ふ來る船  
なり○片待香光ハカタマナチガテリとよむべし。ラガテ  
云ることハ集中ハあれど此ハ光字片待ハ片ハ片就  
を書されバガテリと訓べきなり。片待ハ片ハ片就  
片設あと云片ふて備ふ待よくなり。香光ハ事を帶



了小云言なり。一卷三十一小山邊乃御井乎見我互利神  
 風乃伊勢處女等相見鶴鴨十七十七小秋田乃穗牟伎  
 見我底利和我勢古我布佐多乎里家流乎美奈敷之香  
 物あどあり。又十八十七小伎美我都可比乎可多麻知我  
 底良十九十二小吾妹子我可多見我氏良等あども見  
 ゆ○歌意ハ吾舟ハ沖の方へこぎ出遠放ることなる  
 れもえや吾舟の歸るを迎ふ來む時節あればその迎  
 舟を偏カタクふ待ガテ加ら浦のけしきを見をやしてその迎舟  
 小漕あえむ  
 そとなり

大海之水底豊三立浪之將依

思有磯之清左。

水底豊三ハ浪音ハ海底小鳴響て聞ゆれば云り豊三  
 ハ響なり○歌意まづ立浪之と云までハ序の如く云  
 する小て浪の依と係りてさて吾舟を榜依むと思へ  
 る磯の清くておもゆるさいのむありそやと云るな  
 るべし。畧解小吾いひよらむとそれバ人のいひさ此  
 下廿ニ小ハ大海之磯本由須理立波之將依念有濱之



淨奚久

とあり

アリソユモマシテオモヘヤタマノウラサカル  
自荒磯毛益而思哉玉之浦離

コシマノイメニシニユル  
小島夢石見

玉之浦ハ本居氏那智山の下なる粉白浦といふとこ  
ろより十町をあり西南小有と云り○離小島ハ此を  
昔よりハナレコシマと訓て島名と心得ざるハ非あり  
ふれ小島ふど云むハ古の地名のさま小非忠度朝  
臣集ふさより更て月影寒み玉の浦此をハナレ小島  
鳥あくふりとあれバ其頃ハこれをハナレ小島とよ

めるかサカルコシマと訓べ玉の浦の奥つ方小離

りる小島と云べ本居氏玉の浦の南の海中小島

と云るある○夢石見のやり小ニシと云るハそのさ

ぶの小志あるよと志めせるなり○歌意ハ荒磯も

面白くハあれどその荒磯よりも益りてめでさく思

へバふや玉の浦をさのれる小島がさぶらふ夢小ま

で見ゆる

となり

イツノヘニツマキヲリタキナガタメトアガカツキ  
磯上爾爪木折焼爲汝等吾潛



來之奧津白玉。

爪木ハ、爪折ツキする薪ツキの謂ふて、凡て薪ツキの小きを云なり。  
詩注小粗日曰  
薪細曰莖 ○歌意ハ、磯上小細薪折ツキさきて、海中より  
上りて身をあさめ、又海中小入など、辛くして、汝の  
為ふとて、吾がづき採得來しこの奥つ真珠を、おるの  
ふ思ふなとなり、鰻とる海人の海中より上れ  
ハ、必ず焼火して身を暖むれば、のく云るなり  
ハマキヨミ イソニ アガラレバ ヒムヒトハ アマ  
濱清美磯爾吾居者見者白水

郎可將見釣不為爾。

見者見の下小人、字脱さるふて、ヒトハとあり  
の○歌意ハ、濱の清き故ふ、其を賞めて磯ふ出て居れバ、  
外目小見む入ハ、漁イサる海人と見らむの、吾ハ釣さふ  
せぬことなるふとなり、此上十七 又下丁廿三 又三卷十  
丁 等小能似

こる歌あり

奥津梶漸々志夫乎欲見吾為



里乃隱久惜毛。

奥津梶ハ船の左旁小貫とる楫なり。二卷小委云り。○  
 漸々志夫乎志夫乎ハ莫水手の誤なるべし。さらバヤ  
 ウ。ナ。コ。ギ。と訓べし。既く本居氏も志夫乎を爾水手  
 めり水手の當れど。改めや。と。ふ。め。ると。爾。小。改。め  
 と。る。と。ハ。信。の。と。し。元。來。ヤ。ハ。ヤ。ハ。と。ふ。言。ハ。あ。る。こ。と  
 ふ。し。そ。も。く。稍。を。ヤ。ハ。と。云。ハ。本。彌。の。言。を。重。ね。て。彌。ハ  
 と。云。る。あ。れ。バ。彌。ハ。彌。ハ。と。ま。で。ハ。重。ね。て。云。べ。き。ハ。非  
 ざ。れ。バ。な。り。又。漸。々。小。云。々。成。行。と。ハ。常。小。い。ハ。漸。々。ハ。  
 五卷 丁 十 小 須 臾 毛 余 家 久 波 奈 志 爾 漸 々 可 多 知 都 久  
 保里とありてなる彼卷小委云りさてこの漸々ハ

隱久の上小めぐらして意得べし。莫水手と云へ直小  
 續てハ聞べのらむ。○歌意ハ見れどもあむを。あむ見  
 まろく吾をる里の。漸々小隠れ行事ハさても惜や。  
 今志をらく見てゆむと思ふと。奥つ楫をとめて。  
 船を漕進むることあわれと。楫取小令をる謂なり。奥  
 津梶莫水手欲見吾爲里乃漸々隱久惜毛と續て意得

奥津波部都藻纏持依來十方。



君爾益有玉將縁八方。

部都藻ハ海邊の藻なり。諸祝詞小奥津藻菜邊津藻菜  
と云り○歌意ハ奥つ浪の海邊の藻を纏ひ持來依る  
ときふハそれ小比ひてよき玉も依ことなり。とい  
いのをのりよき玉をばよきるとても吾思ふ君小ま  
さりてよき玉をよせむやハげ小も愛さき君そとな  
り戀歌なり○舊本小一云奥津浪邊浪布敷縁來登母  
と注  
せり

粟島爾許枳將渡等思鞞赤石

門浪未佐和來

粟島ハ三卷小見えて具注り○

歌意かくれゝるところなり

妹爾戀余越去者勢能山之妹

爾不戀而有之之左



乏ハ羨トモシシウラヤき意なり○歌意ハ家の妹を戀トモシシウラヤく思ひつ  
つ吾越行バ兄山の妹山小向居て常小戀トモシシウラヤく思を  
てあるがうらや

まトモシくウラヤよとなり

人在者母之最愛子曾麻毛吉

木川邊之妹與背之山

母之最愛子ハ六卷長歌小父公爾吾者真名子叙妣刀  
自爾吾者愛兒叙とある處小具注り最愛子とあるハ  
言の意を得とる

書様ふり畧解ふマヤゴハ真○麻毛吉ハ枕詞なり既  
子ありと云るハ大らマのゴなり  
く具注り○歌意ハ紀川の邊の妹と兄の山ハ人ふて  
あるあらバ母の最愛と云兄弟の  
子マそウラヤても愛トモシシウラヤき山やとなり

吾妹子爾吾戀行者乏雲並居

鴨妹與勢能山

歌意ハ上の妹爾戀

云々とある小同



妹當今曾吾行。目耳谷吾耳見。

乞事不問侶。

目耳谷ハ目ハ所見の縮りたる言ふて、こゝハ妹の容  
顔ありともと云なり。目とハ入の容顔の己の目小所  
見るともて云言なれば、所見の縮あると知べし。ま  
るを畧解ふ。目ノミダニハ目ニノミ。君之目乎欲など  
のニを畧けりと云るハ大誤なり。○歌意ハ妹の家邊を  
云目小同ト。俗ハ面をありて。○歌意ハ妹の家邊を  
今そ吾ゆくことハ物いひのをさむとも。その容顔を

のりなりとも見せよのとなり。此歌ハ戀歌ふて、其  
意詳なるを、妹とあるを、大方小妹山の事と思ひ誤り  
て、此間小載

しものなり

足代過而絲鹿乃山之櫻花不  
散在南還來萬代。

足代過而ハアテスギテと訓べし。足代ハ紀伊國在田  
郡なり。持統天皇紀三年八月云々。紀伊國阿提郡云々。



又續紀大寶三年條小阿提又天平三年條小阿氏と見  
ゆのくて類聚國史小大同元年改紀伊國安諦郡為在  
田郡以詞涉天皇諱也平城天皇 諱安殿と見えさりさて此も  
本ハ一郷一邑の名なりけむの後小廣く郡名となれ  
るなるべしさらざば絲鹿山も今ハ在田郡の内○絲  
カノヤマ鹿乃山ハ本居氏熊野の道の坂ふて在田郡なり北の  
麓小系我イトガの里又系我王子社と云も有とそと云り金  
葉集小絲鹿山くる人もなき夕晚ふ心やそくも喚子  
鳥哉○還來萬代ハカヘリコトマデと訓べ○歌意  
ハ一五二三四と句を次第で見べし足代過て還り來

む迄イトカ絲鹿の山の櫻花よ散  
むてあらなむと云なり

ナグサ ヤマコト ニシ アリ ケリ アガ コフル チ 名草山事西在來吾戀千重一  
ヘノヒト

重ヘモ名草目名國ナグサメナクニ

名草山ハ紀伊國名草郡小ある山なり○歌意ハ名草  
山と名ふ負されバ名のごとくふ人の心を慰さまし  
むべきふさハあくてな不家路戀しく思ふ心の千重  
の一重もあぐさめしめぬをおもへバ名草と云ハ只



言のみふて、實ふハさもあき事そとなり。六卷丁廿三ふ。  
大汝小彦名能神社者名著始鷄目名耳乎名兒山跡負  
而吾戀之千重之一重裳奈  
具佐米亡國とある小同ド

安太部去。小為手乃山之真木

葉毛久不見者。蘿生爾家里。

安太部去ハ和名抄小紀伊國在田郡英多と見えそ  
の英多へ行と云なり。部ハ方の意ふ物へ行などいふ

へなり。但し畧解小ハハの如く讀べしと云るハ大  
唱るハ最後世の音便ふこそあれ古ハハみふ本音の  
伊名草郡誰戸とあり安太部ハ是ならむハハと訓ハ部  
謂濁るベアと云り是も非なり誰戸アタハと訓ハ部  
太部散去と云でハ詞さらぬをや。○小為手乃山ハ  
本居氏在田郡山保田庄小推手村と云有これの其村

ハ伊都郡の塚小て山のおくなりと云り。畧解小紀伊  
捨山今も有と云現存六帖小見む久小なりそハハ  
る小為手山真木の古木の苔深きまで夕去バ小為手  
の山の苔の上小真木の葉凌ぎ積る白雪○蘿生爾家  
里ハ年經て舊めきこるさまと云なり。蘿ハ苔あり畧  
解小蘿ハ日蔭



葛ふりと云るハ、真木の葉ハ、苔の生べき理ふりと  
 思ひて、強て日のげ葛なりと云るなり。此等ハあなる  
 正しく苔の生るるをよめるハ、非ぞ古へ凡て年  
 経て舊びるる物と、苔生と云ふハ、非ぞ古へ凡て年  
 経るるさまを云詞と心得べし。神佐夫と云詞の例の  
 如く、其も年経て舊めきとるるを云て、神と云まじ  
 きもの小の神佐二、卷四十小、妹之名者千代爾將流姫  
 夫と云の如く、神佐二、卷四十小、妹之名者千代爾將流姫  
 島之小松之末爾羅生萬代爾三、卷十六小、何時間毛神  
 サビケルカカガマノホユスギノモトニケケスマデニ  
 左備邪留鹿香山之鉢摺之本爾薛生左右二十一十四  
 小敷細布枕人事問哉其枕苔生負爲十三小、明日香  
 ノカハノミヲハヤミシタメガタハナシコケムスマデニアラタヨノサキク  
 之河之水尾速生多米難石根羅生左右二新夜乃好去  
 通牟云々まゝ神名備能三諸之山丹隱藏杉思過哉羅  
 生左右ふどよめる小同ト、真木葉ハ苔生まじけれ

ども、さゞ久しく見ざる間ハ、甚く舊めきとると云む  
 とて、のく云るなり。子松の末小羅生と云。又枕小さへ  
 苔生と云る小て、皆唯舊るるをめしと云るのみある  
 を知べし。○歌意ハ、英多へ行小鳥手の山を久しく見  
 ざりしあひぶふ、その山の真木の葉ふまでも苔むし  
 ていと舊めきて、昔見しといは、いとくさまのたれりと

玉津島能見而伊座青丹吉平



城ラ有ナル人ヒト之ノ待マ問チ者ト如ハ何ジ。

玉津島タヅシマハ六卷小具コグ注ツり○能見ヨクミ而伊座イサハ委曲ウヅク小見コミて  
行給ユクへと云小同コト能ヨクハ芳野ヨシノ吉見ヨクミ與ヨの吉ヨクなり。俗伊座イサハ  
出被成デセとい ○青丹アヲニ吉ヨシハ枕詞マクシなり。一卷小具コグ注ツり。諸御シロノミ  
ふコト如ヨシ ○待問マチト者ト如ハ何ニの語コトの終ハ小如何コトと云ハ此下ココノ  
小大海オホウミ之波ノナミ者ハ畏然カレシカレドモ有カ十方イハヒテ神乎カミ齊禮イハヒテ而船出フナデセ為者ハ如何イカニ  
十六ト丁小隱耳コモリノミ戀者コイシ辛苦シマア山葉ヤマハ從出來イデクル月之顯者ツキノアラヤ如何イカニ古  
事記コトヰ小故コト以テ吾身ウカミ成餘處シヨク刺塞汝身ササヘ不成ナラズ合處アヒ而為シテ生ナリ成  
國土クニ奈何イカニふどある。みふ同ト語勢コトバなり。待問マチトハ十七小

安我アガ麻知マチ刀敷爾トフニとあり○歌意ウタノイハ玉津島タヅシマと委曲ウヅク小よ  
く見て行給ユクへ。奈良ナラふる家人イモの君キミが歸カエるを待々マタマタて  
この島のありのこを委ウヅク問トむとき小よく見  
て行給ユクてハいこのふのこへ給ユクむとなり

鹽シホ滿ミタ者バ如イ何カニ將セ為ム跡ト香カ方ツ便タ海ツ  
之ノ神カミ我ガ手テ渡ワタル海ウミ部マ未ラ通ト女メ等ドモ。

方便フタツ海ウミと書カるハ契沖キチウキ海龍王ウミリウオウハ沙謁サテツ羅龍王ラリウオウなり。沙謁サテツ  
羅ラハ梵語フツゴ譯ワカして海ウミといふコトふよそ諸シロの善龍ゼンリウハ衆生シュウジヤウと



利益をる方便ふて、龍宮城をいめてまめば、そのこゝ  
 ろふて、方便海とあけるおやと云り。○神我手渡へ、按  
 ふ手へ戸字の誤なり。さて戸へ、借字ふて、神我門あり。  
 十六、末怕物歌。小奥國領君之、漆屋形、黄漆乃屋形、神之  
 門渡とよめる神之門。小同。さて凡て神とハ、何小ま  
 れいと恐惶きもの。と云名ふて、こゝハ海上の波荒く  
 て、甚恐き所と云るなり。十八、小珠洲乃安麻能於  
 伎都美可未爾伊和多利豆加都伎等流登伊布云々と  
 ある。海をかゝりてみて、御神と云りと聞ゆ。又十三  
 一、小惶八神之渡者、吹風母和者不吹立浪母、疎不立跡。

座浪之立塞道麻云々とあるとも、考合べし。この神之  
 國神島濱をいへり。と見ゆる。小神てふ名、頂る故ハ、彼  
 處の海上のいと荒き故。ふるべきこと。歌の趣ふて、知  
 られり。さして荒木田氏、説ハ、三卷、小神之崎、此、卷、小神  
 前とあるハ、かゝる。越狭野、到熊野、神邑と見え、さる。そこ  
 の崎あり。こゝに漂蕩時、船飯命、即書紀、小海中  
 卒、遇暴風、皇舟、漂蕩時、船飯命、即書紀、小海中  
 母、則海神、如何、厄我、於陸、復厄、我、於海、乎、言、訖、乃、拔、劍、入  
 海、化、爲、鋤、持、神、三、毛、入、野、命、亦、恨、之、曰、我、母、及、姨、並、是、海  
 神、何、爲、起、波、瀾、以、灌、溺、乎、則、踏、波、秀、而、往、于、常、世、鄉、矣、と  
 あり。て、こゝの海のかゝりて、けられ、やあて、神とハ、名、小  
 おふり、けむとある。ふて、いふ、く、神てふ名、の由、を、合、思、  
 べし。○畧解、ふ、十八、小神、我、手、ハ、海、神、の、手、と、云、ある、べし  
 と云と見ゆ。され、ハ、神、我、手、ハ、海、神、の、手、と、云、ある、べし  
 と云る。ハ、い、み、り。○歌、意、ハ、さらぬ、ご、小波、暴、く、て、甚危  
 く見ゆるを、潮満來ふ、べ、い、の、ふ、り、て、の、お、れ、む、と、て、の、



海をとめどもが、かゝこき海

門とことることそとなり

タマツシマニテシヨケクモアレハナシニヤヨニユキテ  
玉津島見之善雲吾無京往而。

コヒマクモハバ  
戀幕思者。

コヒマクモハバ  
戀幕思者ハ戀しく思をむ事を思へバの意あり戀幕  
ハ。コ。ロ。マ。ク。と。訓。べ。し。畧解ハ。コ。ハ。マ。ク。と。訓。る。ハ。こ。ろ  
ざる訓あり。コ。ロ。の。伸。れる。なり。○歌意ハ。玉津島を見し見しと  
常ふ思ひし。今見れば。聞し。ふまさりて面白き地な

り。あ。の。れ。ど。も。此。島。を。見。て。し。の。へ。り。て。よ。き。こ。と。あ  
あ。ら。ど。そ。の。故。ハ。京。ふ。の。へ。り。行。て。戀。し。く。思。を。む。事。を。  
あ。ね。て。思。へ。む。と。な。り。契。沖。云。こ。れ。ハ。玉。津。島。を。あ。ま。り  
ふ。愛。し。て。は。む。と。と。て。か。へ。り。て。よ。く。も。な。し。と。い。ふ  
なり。大。の。さ。ふ。見。て。心。の。あ。ぐ。さ。む。を。の。り。あ。ら。ば。よ。あ  
ら。む。と。都。へ。歸。り。て。も。こ。を。れ。ず。こ。い。お。も。え。る。べ。き。玉  
津。島。あ。れ。バ。な。ま。し。い。ふ。見。る。こ。と。い。ふ。心。ふ。よ。め  
り。第。十。五。中。臣。朝。臣。宅。守。が。歌。ふ。い。と。よ。り。ハ。妹。を。も。あ  
し。き。こ。い。も。な。く。あ。ら。ま。し。も。の。を  
お。も。え。し。め。つ。し。此。心。ふ。似。し。り



クロウシノノ クレンキニ ホ フ シ キ ノ  
黒牛乃海紅丹穗經百礮城乃。

オホ ミヤヒト シ アサリ ス ラ シ モ  
大宮人四朝入爲良霜。

名ウレノ 黒牛乃海ハ本居氏今ハ黒江と云て若山の方より熊野小物来る大路ふて黒江干瀉名高とつぎくふあいつらなりて三里いづれも町つくりて物うる家あげく立つぎふぎハ一き里どもなり皆入海のふとりふてけーきよ一黒江などハ山ふもかこのけとるところなり此こよりむのーハ名草郡あり一と今ハ

海士郡と云り此紀國の或書ふ此黒江の磯へふ昔いと大きふていろ黒き石の牛のあちーるの有て潮みつればかくれ干ぬれば顯れけるをいつの頃よりのやうくふ土ふ埋れゆきて見えぬありぬるを一とせ里人どもあまさちてはりあらをさむとせーあど大きふしてつひふえは里出さでやみぬるを今ハそのあさりまで里つぎきてあの石ハ民の家地の下ふ有よ一ある一と云り○紅丹穗經ハ女房等の装束の海面映るを云り五卷 廿 小麻都良河波 マツラガハ 可波能世比可利阿由都流等多々勢流伊毛河毛能須 カハノセヒカリアユツルタラセ イモガモノス



蘇奴倒奴とあるふ同ド○歌意ハ黒牛の海面の紅の色  
 色小映て、たえぐく見ゆるよ、これハ大宮人の女房  
 等が、あまの舟のりて、貝玉などを求るふよりて、そ  
 の装束の色のりつろひて映ならし、さてもたえぐく  
 見ゆる事よとなり○九卷大寶元年辛巳冬十月太  
 上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首の中ハ黒牛瀉  
 塩干乃浦乎紅玉裙須蘇延往者誰妻と見えたり、今も  
 同度の歌ふて、大宮人ハ從駕の女房等と云ならむ、此  
 前後もみな供奉人の歌と聞ゆ、又同卷三十紀伊國作  
 歌ハ古家丹妹等吾見黒玉之久漏牛方乎見佐府下を

の次ハ玉津島

の歌もあり

若浦爾白浪立而與風寒暮者。

山跡之所念。

歌意ハ若の浦小浪あらし立て、沖つ風の寒き夕暮ハ  
 いとゞ心をそくて、下をぢふ大和の家が戀しく思ハ

るゝとなり、一巻廿六、小葦邊行鴨之  
 羽我比爾霜零而寒暮夕和之所念



為妹。玉乎拾跡。木國之湯等乃

三埜二。此日鞍四通。

湯等乃三埜。九卷大寶元年幸紀伊國時歌の中。湯等前湯等乃前。おど見えたり。古事記仁徳天皇條。歌久理爾云々。とある。ハ。神名帳。淡路國津名郡由良。湊神社とある地。今ハ。異所あり。又曾根好忠の歌。ふよめる由良の門ハ。丹後國與謝郡あり。と本居氏云り。混べらる。○歌意ハ。妹の爲。玉を拾ふ。とて。紀國の湯等埜。小出て。他事なく。此日の暮るまで。玉を求めつるよとなり。

吾舟乃。梶者莫引。自山跡戀來

之心未飽九二。

梶者莫引ハ。梶をとりて。船をこぐハ。引。撓むるや。りなれバ。引と云り。摺引折。おどよめる。ふ同。じ。されバ。こ。ハ。吾舟の。楫を。と。バ。取。て。こ。ぐ。こ。と。お。の。れ。の。意。な。り。此。上。小。奥津。梶。漸々。志。夫。乎。欲。見。吾。爲。里。乃。隱。久。惜。毛。○戀來之心ハ。此海邊のけしきのおもしきを見まら。しく。戀。し。思。ひ。つ。來。し。心。と。云。な。り。○歌。意。ハ。吾。の。



れる舟をバこゝふとゞめよ。楫をとりて漕て異處へ行ことおのれ。此海邊を大のこ小賞思ふふあらば。大和の家ふありくるとより。見まわしくと戀〜

思いつゝ來し其心ふ未あき足ぬものをととなり

玉津島雖見不飽何爲而褻持

將去不見人之爲

褻持將去ハツトモチユカムと訓べし。古今集ふとくる

崎みつの小島の人あらば都の褻

ふいざと云ま〜と云歌もあり

綿之底奥已具舟乎於邊將因

風毛吹額波不立而

綿之底ハ枕詞なり海の底をも又岸より遠き方をも

奥と云バ此ハ枕詞よりの屬ハ底の方ふ云係兼さる

上ふてハ遠き方あり風毛吹額ハ風も吹の意

なり歌意ハ海邊の風景の見まわしければいので



吾沖の方小出るる舟を邊方小依む風もお吹のり。但し波立てば舟危ければ浪をバ立ることあるれとな

大葉山霞蒙。狭夜深而吾船將

泊。停不知文。

大葉山ハハ雲御抄小紀伊とせさせとまへり。さもあらむ九卷十六 碁師歌小母山霞棚引左夜深而吾舟將

泊等萬里不知母とあるハ全同歌なり。此ハ母の上小。大字脱するふて。大母山オホハヤマあらむ。歌意ハ大葉山オホハヤマハ一面小霞となびきおるひ。そのりへ夜もふけされば。いづれの湊小。吾舟を泊べーといふことをあらせさ。てもおるつあ。あしやとなり

狭夜深而。夜中乃方爾鬱之苦。呼之舟人泊兼鴨。







とくちあゝきをのこ又いへば云々。與奇ハ九卷十一  
 小家人使在之春雨乃與久列杼吾乎沾念者又十五三廿  
 丁小與久流日毛安良自などあり。又春風ハ花のあゝ  
 りを與奇て吹と云も同じ。與奇の奇ハ集中ふみお清  
 も清て唱れバ濁るハ誤なり。まあるを春風ハの歌を  
 後世與藝て吹と濁りて唱へ來れるふよりて濁るを  
 雅と思ハ六帖ふこをれ川よく道なくと聞てこそい  
 誤なり。とふの神も立ハよりけれとも見ゆ。○歌意ハ神の埼  
 荒磯もそこと見えこのぬまで。暴浪高く立來ぬる小  
 其を避て他小行へき道のな  
 き小何方より行むそとなり

磯立奥邊乎見者。海藻荇舟海  
 人榜出良之。鴨翔所見。

海藻荇舟ハメカリブ子とよむべし。○歌意ハ磯小立  
 て。沖の方を遙小見やれば鴨の飛翔るの見ゆるよあ  
 れハ海人の海藻と刈舟を漕出するふつきて。其小驚き  
 て。飛あけるなるらしとなり。鴨の驚き翔るを見て。海  
 人船の出るを。知  
 れるさまなり。



風カガ早ハヤ之ノ。三穗ホ乃ノ浦廻ウラ乎コ。榜舟コグ之フ子。

船人フナ動ビト浪サワク立ナ良ミ下タツ。

風早三穗共小紀伊國の地名なり。三卷廿五三穗石室歌又四十加座カザ幡夜能美保乃浦廻之白管仕とある歌小具注り○歌意ハ風早の三穗の浦のめぐりをこぐ舟の船人の聲を揚てあこさく呼さこくあるハ浪の暴く立來する故なるらし。さても危き海上哉となり○十四初下総國歌小可豆思加乃云々とありて。

末句今と全同歌あり。○玉葉集小今

吾舟者。明石之潮爾。榜泊牟奥。

方莫放。狹夜深去來。

明石之潮爾。明字の下小。舊本且字あるハ行な本居氏

云。潮ハ浦の誤ふて。アカシノウラニなり○歌意かくれとるところなり。三卷十九小吾船者

牧乃湖爾榜將泊奥部莫避左夜深去來



千磐破チハヤル金之カネノ三崎乎ミサキヲ過スギ鞆吾者トモアラハ

不忘ワスレジシ牡鹿シカ之ノ須賣スメ神カミ。

千磐破チハヤルと云る意ハ次小云○金之カネノ三崎ハ貝原氏名寄  
小筑前國宗像郡鐘崎町の北織幡シキハムの神社ある山の北  
の出崎小てむのー三韓よりつきおねと渡せーとき  
その鐘の沈めりー小よりて其處ソコを鐘の御崎と云鐘  
のある處ハ織幡山の良の方五町むのり沖中小あり  
て今もいちあるく鐘のあるさま見ゆるよー里人い

へりとあるせり三韓より渡せーと云ること俗説め  
きされど金の御崎と名小負るハげ小も鐘小よれる  
ことなるべー續紀廿八小稱徳天皇神護景雲元年八  
月辛巳筑前國宗形郡大領外從六位下宗形朝臣深津  
授外從五位下其妻無位竹生王從五位下並以トナ被僧壽  
應誘オソ造金埼トキ船瀬也とありかくて此歌の様を思ふ小  
金埼ハ浪いと暴くーて船人の危み恐るゝ處あるべ  
しさて上小注せるごとく海上の暴くて恐こき處と  
神とも云を合思ヒトシ小千磐破チハヤルとおけるも海の暴くーて  
神と云べくされバ浪荒くて強暴チハヤルる神の金の埼と云



ほとこの意小つゞけさるるからむされバ神護景雲元年  
小金埜フチセ船居フネを造れるとこと小賞ホメさまへるも海暴く  
て船人の常小恐るゝ處なる小よりてあるべし○吾  
者不忘ハアヲバワスレジと訓べしなほ次小云○牡  
鹿カノスメカミ之須賣神ハ神名帳小筑前國糟屋郡志加海神社三  
座並名景行天皇紀小志我神又三代實録小貞觀元年  
小此神小從五位上を授奉さまへることも見ゆ本居  
氏志加神社志賀島と云小有て今ハ那珂郡小屬りと  
そと云りこの地ハ集中小三卷四卷十一卷十二卷十  
五卷十六卷等小見えて然シカシカレカレカシカシカシ四鹿四可之加志賀思香之

賀思可之可カシカシカなども書り十六小糟屋郡志賀村和名抄  
小糟屋郡志加シカ釋紀小風土記を引て糟屋郡資訶島昔  
時氣長足姫尊幸於新羅之時御船夜時來泊此島有陪トモ  
從名云大濱小濱者便勅小濱遣此島覓シマミ火得早來大濱  
問云近有家耶小濱答云此島與打昇濱近相連接殆可ツバキテ  
謂同地曰曰近島今訛謂之資訶島とあり○歌意ハ中  
山嚴水第四句ハ吾をバ忘れドの意なりことハ浪暴  
くてかゝこき金の御埜を過行とも吾常小齋奉る牡  
鹿の皇神の吾を捨給ふまじければ何の恐れもあら  
ドと云意あるべしさて此歌ハ牡鹿の神職などの歌



あるべしといへり。さもあるべし。但神職あらざとも。  
資訶シカカの地スミ居人シカノハ常ふその神力をこのむべきこと  
論ふ。こと小牡鹿皇神ウツクミノハ海神ウツクミノふまゝませべいよく  
神徳を仰ぐべき理なり。舊事紀ソコツ小も底津少童神ウツクミノ中津  
少童神ウツクミノ表津少童神ウツクミノ此三神者何  
曇連等齋祠イツキマツル筑紫斯香神シカノとあり

天霧相日方吹羅之水莖之崗

水門爾波立渡。

日方吹ヒカタフクハ袖中抄ヒツシヤル顯昭云日方ハ坤風ヒツシヤルなり。無名抄云。  
ひのこハ巽風タツミあり。晝ハ吹で夜ふく風なりと云り。今  
土左人ハ六月の頃日中ヒツシヤル南風の吹を日方吹と云り。  
いづれ是ヨあらむ。蝦夷エミ國風軍記エミ蝦夷言エミ條エミ南をいあ  
猶考モトメ。○水莖ミツクキ之ハ本居氏岡の枕詞マシふして地名ナふハあ  
らびあるを昔より或ハ筑前或ハ近江の地名ナと心  
得來つるハひのこことなり。水莖ミツクキハみづくミくキき莖キとい  
ふことふて草木の莖キなり。さて岡とつづくツくるハ稚ワカの  
意なり。和ワと乎ヲと通へり。されバみづくミくキき木の稚ワカ  
と云意イふてみづくミくキきの岡ノとつづくツくるなりと云り。



なほ玉勝間一卷小其説具見えり○崗水門ハ和名抄小筑前國遠賀郡神武天皇紀小十有一月丙戌朔甲午天皇至筑紫國崗水門仲哀天皇紀小八年春正月己卯朔壬午幸筑紫時岡縣主祖熊罥云々入岡浦到水門云々即泊于岡津仙覺筑前國風土記を引て云塙舸縣之東側近有大江口名曰塙舸水門云々あどあり○歌意ハ虚空の方小霧の立渡りて日方の風の吹らし其風小催されしと見えて崗の湊小浪の暴く立こころなり

大海之波者畏然有十方神乎

齊禮而舩出爲者如何

歌意ハ大海の浪おれて危くおとろしこれふてハ舩イヒマツ發イヒマツせべきやりなく然れども海神を拜祭り海上平安サキカらむことを祈申て舩出しさらば如何イヒマツ

あらむと楫取あど小問かくるよしなり

未通女等之織機上乎真櫛用



搔上栲島波間從所見。

本句ハ序ふて栲島タクシマを云むよめなり。機トシおるふ糸イトをぢのままをぬぬめめふ。櫛シもて搔カあげげよせ整トシる意イをもて。栲タクふ云係ケり。多久タクハ。髮カミ多久タクの多久タクふて。搔カよせ整トシる意イの古言コゴトと見えミええこれコトバハなり。畧解リョクゲふ。さくハ。さぐさるの約言ヤクゴトふて。ああげげととぐぐるの濁ナり。さくハ。久キウを清例シヨウレイふて。ももととより別言ベツゴトなり。○栲タク島シマハ。和名抄ワナヒナシふ。出雲國イツノ島根郡シマノ多久タクと見ミゆ。其地コノチの○歌ウタ意イかくれかくるるとところところななく

塩早三。磯回荷居者。入潮爲海。人鳥屋見監。多比由久和禮乎。

塩早シホハヤ三ミ云々ニハ。海潮ウミウシの急イくくて危アききの故ユふ。沖ウチふ出デででて。磯回イソカふ居イババの意イなり。○入潮イリウシ爲ニハ。按アふ。入潮イリウシハ。朝入アサリとありアしシを誤アれるルなり。アサアリリススルと訓アべべ。此コノ上ウヘ六ム十五ム。朝入アサリ爲ニ流リカカどあるルを思オモ合アべべ。○歌意ウタノイハ。海潮ウミウシの急イくくて危アききの故ユふ。沖ウチふ出デささぎぎ。速ハヤふ漕行ソウコウことあある



をぞして磯のめぐり小居れば外目小見む人ハ漁業  
をる海人と見らむのさる者小ハあらで旅行をる吾  
ふるものとなり此上又三卷

ふも此歌ふよく似たるあり

浪高之。奈何。梶取。水鳥之。浮宿。

也。應爲。猶哉。可。撈。

イカニカゲトリ。イカニ。イカニカゲトリ。ミヅトリノ。ウキ子  
奈何梶取ハ。奈何ハ終ふめぐらして聞べし。梶取ハ。檣  
師よといふ意なり。和名抄小文選吳都賦云。檣工。檣師。

和名加知止利とあり○水鳥之ハ浮宿といをむ料の  
枕詞なり○歌意ハ海の浪暴く高くて危しこれふて  
ハ漕行べき謂ふしいざ檣師よ此處小留て今夜ハこ  
こ小浮宿して明をべきの又ハ猶この浪を凌ぎて漕  
行べきのいのみをべきそとな

り此歌ハ檣師と相議る意なり

夢耳。繼而。所見。小竹島之。越磯。

波之。敷布。所念。



夢耳ハ夢小本郷の事のみつゞきて見えつゝの謂ふ  
 り耳ハ他事ハ見えど本郷耳の意あるべし〇繼而所  
 見小ハ乍字の誤なり本居氏のハの誤ありツギテ  
 〇エツトと訓べし九卷十六小曉之夢所見乍梶島乃  
 石越浪乃敷豆志所念とあるを思合べし〇竹島ハ近  
 江の高島あり第三四句ハ敷布をいれむとめ小目前  
 小見とる處をいへるなり〇歌意ハ本郷の事のみ夜  
 夜つゞきて夢小見えつゝ頻々小こひしく思をるゝ  
 ことゝ  
 なり

静母岸者波者縁家留香此屋  
シヅケクモキシニハナミハヨセケルカコノイヘ

通聞乍居者  
トホシキツツフレバ

歌意ハ家の内小居ながら聞つゝをれば風雲もあく  
 和ドのふおぎて海岸小ハ静小も浪ハよせける哉とあ  
 り此屋通云々ハ家内小居な  
コノイヘトホシ  
 ながら浪の音を聞よふあり

竹島乃阿戸白波者動友吾家  
タカシマノアトカハナミハサワケドモアレハイヘ



思モフ五百入イホリ鉞染カナシメ。

阿戸白波者白ハ河字の誤なり。アドカハナニハふり。  
九卷十小高島作歌高島之阿渡河波者驟鞞吾者家思  
宿加奈之彌とあり。阿戸ハ近江國高島郡あり。此下廿八  
旋頭歌小丸雪降遠江吾跡川揚云々九卷十四小高  
島之足速之水門又十六高島之足利湖ふど見ゆ○歌  
意ハ旅の廬のいふせくかふき故小本郷と戀しく  
おもふ心ハ阿戸河波のかくましくさこく音小もま  
ぎれどとなり。二卷人麻呂歌小竹之葉者三山毛清

爾亂友吾者妹思別來  
禮婆とある小似より

大海之磯本由須理立波之將

依念有濱之淨奚久。

磯本由須理ハ石根とゆをり動のをむあり。大浪のこ  
つと云り由須理ハ動のをと云古言あり。佛足石碑歌  
小美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利都知  
佐閑由須禮云々源氏物語葵小所々の御とぶらひの



使ふど立ちみされど得聞えつゝのぞゆを望みちてい  
みしき御心まどいどもいとおそろしきまで見え給  
ふ賢木小宮の内ゆをりてゆしりおきみちるり須  
磨小世ゆを望てとしみきこえ濤標小その秋をみよ  
し小まうで給ふ願どもをこし給へればいのめしき  
御ありきふて世中ゆをりて上達部殿上人これむく  
とつゝのりまつり給ふ未通女小おやのこ世ゆを望て  
所せき御いそぎのいきやいかり云々その頃世小め  
でゆをりけるおとぎの御をばさらなり云々世中い  
びきゆをれる御いそぎあるを若菜小こゝらの男女

上下ゆをりみちてなきとよむ小云々院のりちゆを  
りみちて思いなげく人おやのり云々殿のりちゆを  
りてのしる枕冊子小家ゆをりてとりこる聲のこ  
ぞ成ぬるいとをさましおちくば物語小物見る人々  
小ゆをりてこらえる云々殿のりちゆをりみちての  
のしるうつ物語小山くづれ地これさけてな山  
ひとつ小ゆをりあふ云々此山川つねの心地せげ山  
ゆをりて大空いびきて云々又そのがくを上下ゆを  
りてまれば榮花物語小殿のりち今ハつみあへど  
ゆをりみちるり云々ことしハつゝのひの君の御事を



世中ゆをりていそがせ給ふ云々。かげろふ日記。あ  
めのしゆをりてふりの宮へ人をしりまどふなど。  
かほ物語書小多く見えさる言なり。袖中抄小あさも  
よいきの川ゆをり行水のいつさやむさやいるさや  
むさやどあり。○此上十八小第二句水底シラトヨミ豊三とか  
えれるのみ小て。全同歌あり。歌意ハそこ小具注り

珠タマ速クシゲ見ミ諸モロト戸ヤマ山ヲ矣ユキ行シ之カ鹿バ齒ハ面オモ

白シロク手シ古テ昔イニシ所ヘ念オモホエ

珠速シクシゲ干録字書小。運運上通下正とあり。速とも作ハ。枕  
詞なり。契冲云。箱小盖フタと身とあれば。玉くしげ身と云  
のけさり。○見諸戸山ミモロトヤマハ。契冲云。山城國宇治郡あり。  
畧解小。備中あり。○歌意ハ。見諸戸山ミモロトを行過ミのバ。其  
山のけいさの面白くみゆるふつけて。其山を過て後  
までも猶ふりふり代の事をさへ。思ひ出られて慕ハ  
るゝとなり。此山ふつきさるる故事  
あどあるを。思ひてよめるならむ

黒玉之。玄髮山乎。朝越而山下



露爾沾來鴨。ツユ ニ スレニケル カモ

玄髮山クロカミヤマハ契沖下野なり。今の日光山ふりと聞ハ。あゝりやいなや。いまごあらざと云り。日光ハ河内郡あり。類字集ルイジシツふも。黒髮山クロカミを下野と云。貝原氏日光名勝記カミヤマトキ。黒髮山クロカミのことと委しく記せり。あゝれども今按イマシラふ。前後のついでを思合オモヒアヒる。此コノ歌ハ十一ユヱ下シタ鳥玉トリタマ黒髮クロカミ東國トウクニ小コノハあらざる。猶考ナカメべし。山ヤマ草クサ小コノ雨アメ霰シニ敷シ益キ益キ所オモ思モトともあり。新後拾遺集シンゴシユイシツふ。頼らむ事コトを遠トホのらぬ。黒髮山クロカミ小コノふれる白雪シラユキ。○歌意ウタノイかくれとるところなく。六帖ロクテツ小コノ此コノ歌ウタと。りヲ玉タマの黒髮山クロカミを今日こんにちこえて。あづくふあづいいささくくぬぬれれ小こける哉や。とて載のり

足引之山行暮宿借者妹立待。アシヒキノ ヤマユキクラシヤドカラバ イモ タチマチ

而宿將借鴨。テ ヤドカサ ム カモ

歌意ハ山路行暮ウタノイハ山路行暮して旅宿リョシュクを借かバ妹イモの門カド小こ立待タチマチて宿借シュクカむむののかかゝゝる山路山路小こハささる妹イモもああららずずののささてもてもおほつおほののなき山路山路ををとななり。畧解リョクゲ小こ妹イモの待マチししととありあり。此コノ妹イモハハくくづづつつああどどいいふふ類ルイ昔キヨも有ありりののといいへへるるハハいいささくくああららへへりり。視渡者シワセバ近里チカキサト迴乎チカキサト。田本欲タモトホリイマソ今夜イマソ



アガコシ。レフリシヌニ  
吾來禮巾振之野爾。

全キサトミヲ  
近里廻乎ハ。近き里のあさりある物をの意なり。廻ハ  
こと訓べし。ワと訓ハ古。浦廻磯廻あどの廻なり。○今  
衣吾來ハイマソアガコシと訓べし。○禮巾禮字ハ領  
の誤なるべし。領巾ハ既出つ。○歌意ハ本郷へ歸る小  
見渡ハ甚近き里なると。道の曲れる故小そを遙の  
小回りて。からくして。妹が領巾振て別と慕ハ野小  
今そ來りハとなり。契沖の清少納言のちのくして遠き  
ものくらまの山のつづらとりと云るおもひ合をべ

一と云り。十一。四。小見度近渡乎回今哉  
キマストモツソル  
來座戀居とあるハ本の句今と同ト

ヲトメラガハナリノカシヲユフノヤマクモ  
未通女等之放髮乎。木綿山雲

ナ。タナビキイハアタリ。ム  
莫蒙家當將見。

本二句ハ木綿といをむ料の序なり。放髮といハなる  
えなりとて。女十四五のはとまでハ未結あげざるを  
云て。其放髮と結と云係り。○木綿山ハ和名抄ハ豊  
後國速見郡由布。本由を田とある。其處の山あり。  
作るハ誤なり。



兵部省式小豊後國驛馬由布五疋これら本小ハ 豊後  
 國風土記小速水郡柚富郷此郷之中栲樹多生常取栲サハオモタリ  
 皮以造水綿因謂柚富郷とあり十卷六十 小思出時者オモイヅルトキハ  
 爲便無豊國之水綿山雪之可消所念とあり○歌意ハ  
 遠く別れて來し本郷の家のおそりを顧み見むそ木  
 綿山小雲ふあびきて覆ひ隠れことあわれとなり

四シ可能白水郎乃釣船之網不カテニコノロニモヒ

勝カテニ堪情念而出而來家里テイデ、キニケリ

釣船之網釣船ノ網 網字元曆本ハ網字元曆本 小ハ堪をいれむさめなり釣船  
 の網ハかさくつくりさるものなれば繫ツナふよく堪れ  
 バ、おく云係さり勝堪れハ堪の一言ハのみか、れり、不  
 布留フルの早田ハ勝の穂ハふハ出ハぐの例ハ○不堪ハ今按ふ不の  
 ぶりこの事ハ既ハく契冲も云り  
 下小勝字脱ハさるなるべし夕ハカテニと訓べし畧解  
 二三句をハツリハスルハフ子ハツナハヘズハとよめるハ非  
 ぎ釣船をハツリハスルハフ子ハツナハヘズハとよめるハ非  
 てツナハギハアハヘズハの又ハ堪ハ絶ハの誤ハれハる○歌意ハ本  
 小てツナハギハアハヘズハの又ハ堪ハ絶ハの誤ハれハる○歌意ハ本  
 二句ハ序ハふて堪ハ忍ハひて此方小居むと思へども深く  
 思ふ心小得堪ハ忍ハひあへざりて出ハて來ハふけりとな  
 るべし此歌ハ相聞ハふるを誤ハて此小載ハしなるべし



之シ加カ乃ノ白ア水マ郎ノ之シ燒ホ鹽ヤ煙ケ風フ乎リ

疾イ立タ者チ不ハ上ノ山ボ爾ラ輕ズ引ヤ

カゼヲイタミ風乎疾ハ風がつよき故みの意なり○歌意かくれと

るところなし三卷三十日置少老歌小繩乃浦爾塩燒

火氣夕去者行過不得而山爾棚引とある

と同意の歌なり此歌六帖ハ初句をま

右件歌者  
古集中出

古の下歌字

脱せるの

大オ穴ホ道ナム少デ御スク神ナ作ミ妹カ勢コ能ナ山シ見イ

吉ヨシ

大穴道ハ大穴ハ於保那の借字なり道ハ美知を牟遲

小轉して借用さるゝ若ハ穴の下小六字脱さるゝの○

少御神ハ少名毘古那神なり少名毘古那を少名との

足姫とのみ申す日並所知を日並とのみ申せし類ふ







浮沼池ハ未考得也。八雲御抄小石見と載させたまへ  
 るハ、いゝあらむ。菱採ハ菱を採取とての意なり。  
 十六廿八小豊國企玖乃池奈流菱之宇禮乎採跡也妹  
 之御袖所沾計武とあり。○我染袖ハ若ハ袖ハ衣の誤  
 小ハあらざるのさらバアガシメコロモと訓べし。  
 ソメシソテふてハ今少古事記八千矛神御歌小斯米  
 穩ふらざるやうあり。許呂母とあり。○沾在哉ハヌレニケルカモと訓べし。  
 在字ケリケルと訓例上小云り。○歌意かくれさると  
 ころ  
 なし

妹イモガ爲タメ菅實スガノミ採トリニ行ユキシ吾アレ山ヤマ路ダニ惑マドヒ此コノ日ヒ

暮クラシツ

菅實ハ麥門冬ヤマスゲの實なり。○行吾ハユキシアレと訓べ  
 し。畧解ユクワレヲと訓てこれあるを。○歌意ハ妹  
 の爲小と麥門冬ヤマスゲの實を採小行ハその山路小ふみ  
 迷ひてがふここなさるどるうちふつひ小此日と暮  
 かつるよ  
 となり



右四首。柿本朝臣  
人麿之歌集出。

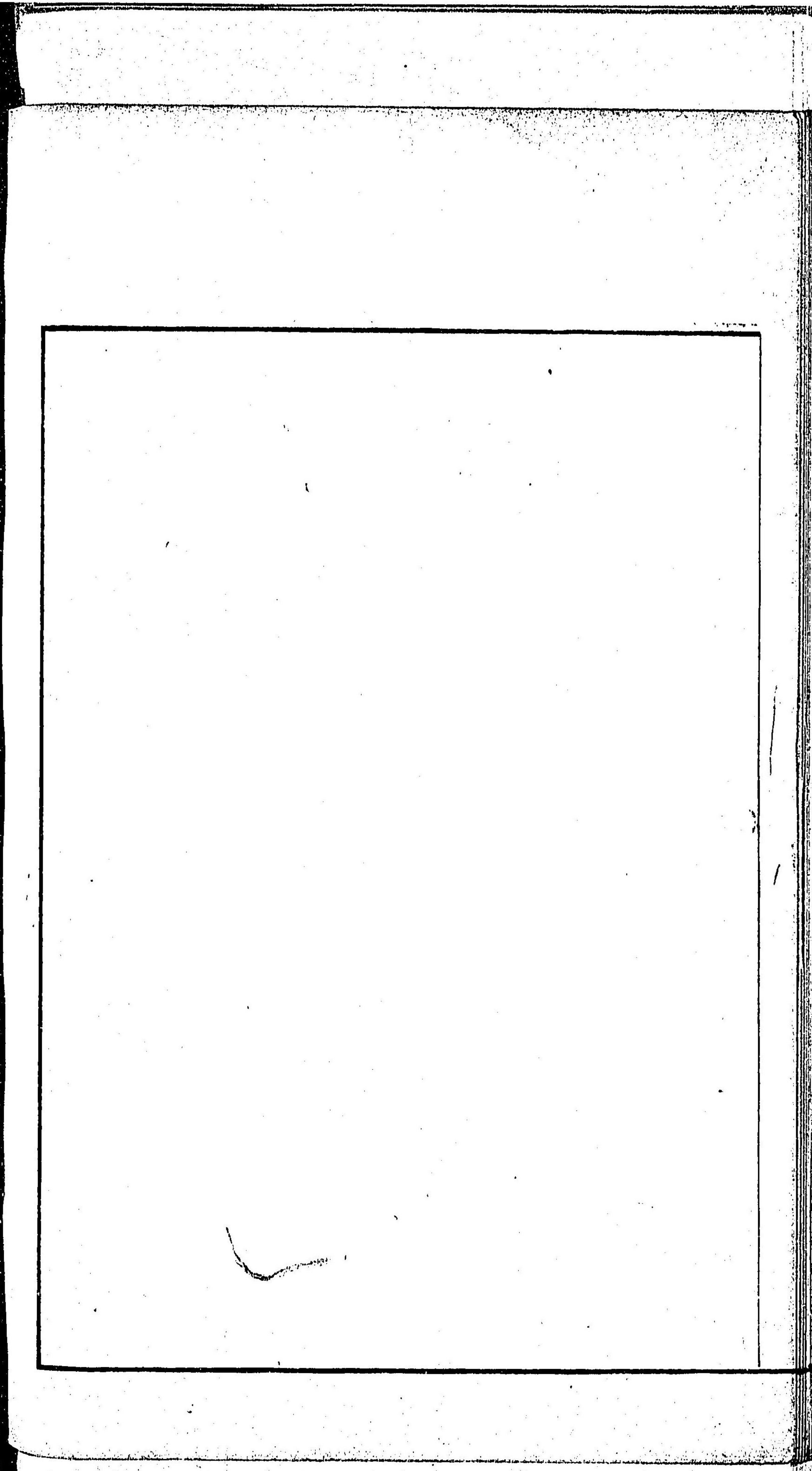
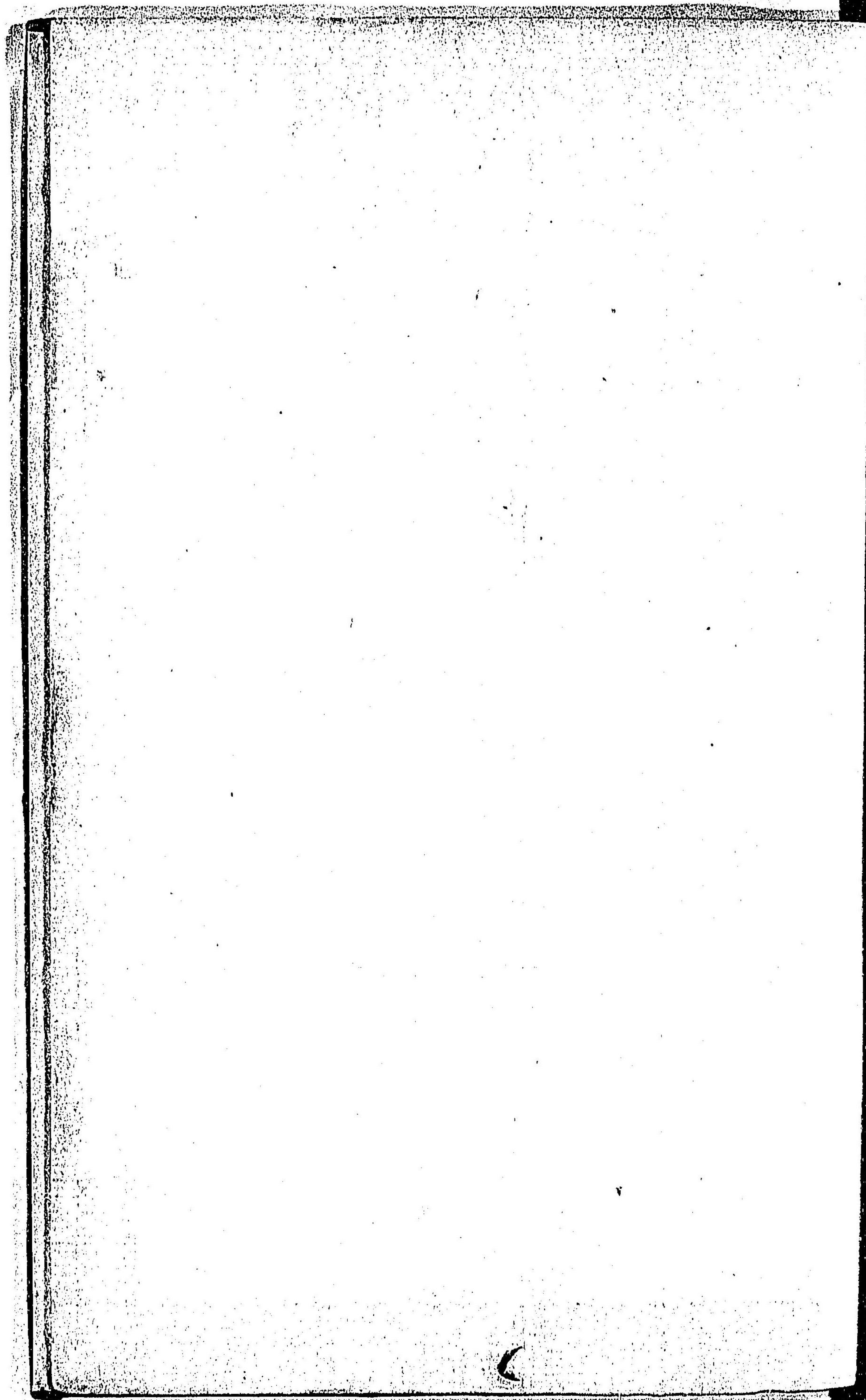
名兒乃海乎。朝榜來者。海中爾。

鹿子曾鳴成。何怜其水手。

鹿子曾鳴成。鹿子ハ借字水手ナリ。鳴ハ呼字の誤ナリ。  
集中ハ水手の聲よびと多くふめり。○何怜其水手と  
ハ何怜ハ賞怜オモシロシク意ナリ。こハ九卷はとゞきとの  
歌ハ鳴て行ありあをれ其鳥といへるハ同ノ語勢ナ

り。と契沖云里。○歌意ハ名兒の浦を。朝發して漕來れ  
バ。朝おぎして海面平のふる小己の友船を誘ふとあ  
ら。沖中小水手の聲を揚てそ呼ある。あをれ賞怜の  
その水手のさまやとなり。○此一首舊本此間小かく  
して。卷末小再び羈旅歌と標して載り。其ハ古く傳  
寫せる人のふと此間小寫し脱しある小よりて。更小  
卷末小標して載しふらむ。  
故。今改めて此間小収つ







16
125
96



